

IV-40 地区イメージ形成のための認知構造の同定に関する研究 <吉祥寺をケーススタディー地区として>

早稲田大学大学院 学生会員 福光了良
 東亜大学校 正会員 尹 祥福 早稲田大学理工学部 フェロー 中川義英

1. はじめに

地域イメージ形成プロセスにおける研究は、地域の構成要素である駅前地区に焦点を合わせているものが多く、実際に駅前形状パターンの研究や地域の認知構造分析などが行われている。

本研究では駅前地区イメージ形成を行うため、ストラクチャーに着目した認知構造を提案し、それによって得られた調査方法を提示する。

2. 本研究の基礎概念

本研究では以下のことを前提に研究を行う。

- (1)地区イメージはストラクチャーの影響を受けている。
- (2)認知構造とは①認知対象（駅前地区イメージ）②認知媒体（ストラクチャー）③認知主体（人々）の関係をいう。

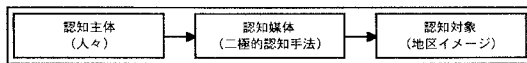


図-1 既存研究における認知構造図

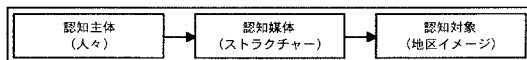


図-2 本研究における認知構造図

- (3)対象を主体が媒体を通して認知するときに発生するものをイメージとする。
- (4)駅前地区は人々にイメージされる対象であり、その駅前地区のイメージアビリティ（イメージされる度合）の向上が地区形成にとって重要である。
- (5)イメージは①アイデンティティ（そのものであること）②ストラクチャー（構造）③ミーニング（意味）から成り立ち、アイデンティティとストラクチャーは形そのものがもたらすものであり、ミーニングは社会的、歴史的、個人的、その他様々な要素から生まれるものである。
- (6)アイデンティティとストラクチャーは反応的イメージであり、ミーニングは記憶的イメージである。
- (7)反応的イメージは事物から受ける直接的な刺激によって形成されるものである。
- (8)記憶的イメージは時間性に強く影響を受けており、徐々に形成、修正されたものである。

- (9)イメージ構造は街に存在するイメージ量を空間的配置によって表現される構造である。
- (10)自由想起法による認知構造分析は記憶的イメージの抽出が可能であり、SD法による認知構造分析は反応的イメージの抽出が可能である。
- (11)本研究のストラクチャーは構造物を示す。

3. アンケート調査の特徴

- (1)今回の認知構造の有効性を検討するため、2つのアンケート調査を実施する。既存研究においてすでに使用された10対の形容詞対を評定尺度として選定し、地区イメージを活性度と整序度という尺度で安定的に抽出が行えるかを検証する。
 - (2)アンケート「調査A」では自由想起法+SD法を用いて、記憶的イメージから反応的イメージの評価を行う。
 - (3)アンケート「調査B」はアンケート調査Aから得られる想起確率の高い14ストラクチャーについて反応的イメージの抽出を行う。
 - (4)2つのアンケートによる評価空間の再現性を検証することにより、新しい試みである記憶的イメージと反応的イメージを統括した自由想起法+SD法によるアンケート「調査A」と既成SD法によるアンケート「調査B」の相違を検討する。
- 各アンケート調査の年代別構成比を以下に示す。

表-2 各アンケート調査の年代別構成比（%）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
調査A	22.3	45.9	6.8	6.8	8.8	5.4	4.1	100
調査B	22.8	46.3	7.4	7.4	6.6	5.1	4.4	100

各調査とも対象地区に來街した人を調査Aでは148人、調査Bでは136人、無作為に抽出し、SD法ならびに自由想起法による調査を比面接方式により実施した。また、各調査において異なる被験者を抽出した。

4. アンケート調査の有効性の検討

2つの調査方法で抽出される全体イメージの性質に相違がみられる可能性があるため、全体イメージの相違を検討することが必要である。そこで各調査で得られる全体イメージを因子分析にかけることにより、因子軸の類似性を考察する。これにより類似性の高い因子を軸と

Keywords：認知構造、地区イメージ、ストラクチャー

連絡先：〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 51-15-11 TEL 03-5286-3398 FAX 03-5272-9975

するイメージ評価空間の設定の可否をみることができ、異なる方法で抽出された全体イメージの性質が類似していることを検討した。今回選定した 10 対の形容詞対のよる SD 法の調査によって得られた評定値を用いて分析を行なったところ各調査とも因子負荷量及び特徴的に寄与する形容詞対から判断して、2 つの因子が得られた。第一因子は「陰気-陽気」、「閉じた-開いた」、「静的-動的」、「新しい-古い」、「暖かい-冷たい」が大きく寄与しており、運動体としてのイメージを表わすと考えられたことから「活性度」を表わす尺度として解釈された。第二因子は「聖な-俗な」、「秩序-混沌」、「細かい-粗い」、「感情-理性」、「男性-女性」が寄与しており、空間構成の状態を表わすと考えられることから「整序度」を表わす尺度として解釈された。累積寄与率は第一因子までで調査 A は 20%、調査 B は 18%、第二因子までで調査 A は 39%、調査 B は 34%であった。各調査の全体イメージの評価データは類似性の高い因子軸をもつ評定空間設定が可能と判断できる。これにより、異なる方法を用いて抽出した全体イメージの評定データの性質がほぼ同じであると証明できた。各調査の因子分析結果においては寄与率は一般的には低い値であるが、因子に寄与する形容詞対は加藤らの調査結果と類似していることから、全体イメージにおける第二因子までの累積寄与率が高い値を示さない場合でも一定であることがわかる。このことから、認知主体が「活性度」と「整序度」により、認知対象をイメージしていることが今回の選定地区でも確認することができた。

表-1 因子負荷量比較表

形容詞対 (-) (+)	調査A		調査B	
	第一因子	第二因子	第一因子	第二因子
新しい-古い	**0.418	0.085	**0.406	0.233
陰気-陽気	**0.777	0.045	**0.700	0.241
秩序-混沌	0.148	*0.640	0.191	*0.358
静的-動的	**0.578	0.483	**0.493	0.388
感情-理性	-0.072	*0.469	-0.077	*0.527
閉じた-開いた	**0.756	0.251	**0.699	0.164
聖な-俗な	0.062	*0.647	0.144	*0.632
暖かい-冷たい	**0.567	0.065	**0.616	0.108
男性-女性	0.107	*0.405	0.044	*0.307
細かい-粗い	-0.040	*0.595	-0.114	*0.616
固有値	2.05	1.88	1.84	1.58
寄与率(%)	20.53	18.78	18.44	15.82
累積寄与率(%)	20.53	39.31	18.44	34.26

5. 吉祥寺における認知構造分析

(1) 各属性の認知構造相意における検証

属性別全体イメージ平均値に対して調査 A と調査 B の性別・年代別データを用いて因子分析を行い、評定空間設定における因子軸の解釈を行う。これにより、吉祥寺において認知主体の属性(性別,年代別)による認知構造の差異を検証した。また、本研究における認知構造の概念が加藤ら¹⁾の認知構造の概念と異なっているため、

その相違の検討も行った。その結果、活性度軸と整序度軸で全体イメージを認知していることについては性別・年代別で差異は見られなかった。調査方法別では調査 A において、全サンプルの因子軸が逆転した形をとった。属性別に考察すると各年代において男女で異なる傾向がある。調査 A と調査 B の結果では、同じ年代であっても評定空間において位置関係が異なることから、調査 A と調査 B では総合的にみると同じ性質がみられたが、属性別に見たときには異なる性質を持っていることがわかる。これにより、調査 A と調査 B では異なる全体イメージの評定データの抽出方法の過程の違いによって、性質の異なる結果が得られると判断できる。以上のことから、各調査結果は既存研究の考察と一致しており、今回の認知構造の解釈は妥当であると判断できた。

(2) 属性別認知構造の検討

属性別に認知構造の相違を確認したうえで、各調査の性別・年代別データを用いて因子分析を行うことにより、属性別の認知構造の検討を行った。また、各年代のサンプル数に偏りがあるために、少年期(10代)、青年期(20代)、壮年期(30代,40代)、老年期(50代,60代,70代)に年代を分けた。その結果、各調査とも因子軸は「整序度」、「活性度」で解釈できた。特徴として、各調査とも壮年期における因子軸の解釈に用いた形容詞対の寄与率が他の年代と異なり、若干の違いがみられた。主要要因としてサンプル数の極端な不足が考えられる。以上のことから、属性による認知構造の相違はなく、評定空間の解釈は「活性度」、「整序度」であると言える。

6. まとめ

本研究では、地区イメージ形成のための認知構造を既存研究の成果を基に構築し、その有効性の検証を試みた。以下にその結果を示す。

- (1) 地区イメージは活性度と整序度という尺度で認知されており、その尺度は 10 対の形容詞を用いて安定的に抽出できる。
- (2) 地区イメージを活性度と整序度で認知する構造そのものは、年代別においても一定である。以上のことから今回の認知構造は加藤らの認知構造を裏付けることができ、有効性を確かめることができる。

本研究では心理的環境把握を行うための調査方法に焦点を合わせた。しかし、本調査における有効性を証明するには多くの地区において同様の調査を行う必要がある。また、地区の構成要素であるストラクチャーと心理的空間との関連性を明らかにしていくことが今後の課題である。

【参考文献】

- 1) 加藤哲男, 川上洋司, 本多義明: 地域イメージに関する認知構造の研究 第 31 回日本都市計画学会学術研究論文集, pp.337-342, 1996.
- 2) K. リンチ: 都市のイメージ, 丹下健三, 富田玲子訳, 岩波書店, 1967.